

## 男性家庭科教員増加に向けての課題

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-06-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Watahiki, Tomoko, Yamakawa, Gaku メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00051118">https://doi.org/10.24517/00051118</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 男性家庭科教員増加に向けての課題

### Problem for the Increase in the Number of Male Home Economics Teachers

綿引 伴子・山川 岳\*

WATAHIKI Tomoko, YAMAKAWA Gaku

#### I 研究の背景と目的

家庭科は、戦後、男女共学の理念のもとに「民主的家庭建設の教育」を掲げて新設教科として誕生した。しかし、1958年告示学習指導要領で中学校が、また1960年告示学習指導要領で高校が、女子のみ必修科目となった。その後、1979年に国連が女子差別撤廃条約を採択し、日本は1985年の同条約の批准に向けて国内法制度整備に取り組み、その1つとして教育課程の改正を行い、1993年に中学校で、1994年に高校で男女共通必修（以下「男女共修」とする）が実施された。それまでの30余年は、中・高生男子は家庭科を学ばず女子のみが学んできた。

家庭科が男女共修となって20年以上が経過した現在では、児童・生徒・学生や教員は、家庭科を男女ともに学ぶことを当たり前ととらえているように思われる。抵抗感や違和感等に類する発言はほとんど聞かれなくなった。大学生を対象にした調査では、家庭科の男女共修について9割以上が肯定的にとらえており、男女共修家庭科の必要性が認識されている（藤田，2013）。

一方、教える側の教員の状況は、他教科に比べて男女比の違いは大きく、家庭科教員における男性の割合は少ない。1989年～2010年の、全教員に占める家庭科教員の割合は、女性家庭科教員が10～17%であるのに対し、男性家庭科教員は中学校・高校いずれも0.1%前後である。男性家庭科教員の割合は、わずかに増加しているが、中学校・高校ともに1割以下である（田中，2013）。この現状には、家庭科の前身が戦前の家事科・裁縫科であった歴史的背景や、前述したように1950年代後半から30余年中学

校・高校の家庭科が女子のみ必修だったことなどの社会の性別役割分業観が今なお影響していると考えられる。

しかし、これまでの研究から、男性家庭科教員による教育効果が明らかにされている。生徒のジェンダー・バイアスの修正や男子生徒の学習への意欲喚起にプラスの影響をおよぼしていることがわかっている（麓・杉井，2005）（田中，2013）（吉野・深谷，2001）。特に男子生徒に対しては、男性家庭科教師の存在によって、内面に秘めた家庭科への興味・関心を引き出し、家庭科を好む者の増加をもたらしている（麓・杉井，2005）。

また、学校における教科による教員比率の男女差や管理職比率の男女差は、それ自体が生徒たちに隠れたメッセージを送り、ジェンダー・バイアスを強めていると考えられる。このような隠れたカリキュラムをできるだけなくしていくことは学校教育の課題といえる。

これまでの研究では、男性家庭科教員の現状や教育効果は明らかにされているが、男性家庭科教員が増加しない背景を探るまでにいたっていない。そこで、本研究ではM-GTAを用いて、男性家庭科教員が増加しない背景を探り、家庭科教育の課題を明らかにすることを目的とする。

#### II 研究方法

本研究では「Modified Grounded Theory Approach（以下「M-GTA」とする）」を用いて分析する。「M-GTA」とは、「質的研究法の1つとして広く知られているグラウンデッド・セオリー・アプローチ（Grounded Theory

Approach (以下「GTA」とする)に独自の修正を加えた、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの分析技法であり、質的研究法の1つである。GTAとは、1960年代にアメリカでグレーザーとストラウスによって提唱された。それまでの質的研究は、初めからある理論の下にデータを分析するものであったものに対して、データに重きを置き、そこから理論を作り出す手法がGTAである。複数のデータを概念として取り出し、複数の概念を組み合わせることにより、1つの理論を作り出す。GTAは具体的なデータの取り扱いについての言及がなされていないため、それが補われたものがM-GTAである。M-GTAは、変化し得る日常に対応するための理論の一般性を作り出すための手法であり、理論を実際の日常で利用することを前提としている(木下, 2003)。また、1つの専門的な分野について1つの理論を構築することで、別分野での応用が期待されている。本研究は、男女差の大きな職種や組織等で、社会の変化によって大きく変わる他分野の研究についても応用ができるのではないかと考え試みることにした。

□調査対象者

学校教育の現状や家庭科という教科について十分に理解していること、今後の教育現場を担っていく存在であることから以下の条件を満たす大学生6名(男子4名, 女子2名)とした。

- ・教員養成学部で学んでいる
- ・教育実習を経験している
- ・家庭科の授業を大学の講義で学んでいる
- ・家庭科が専門のコース等ではない

□調査時期

2015年11月～2016年1月

□インタビュー内容

- ・家庭科の印象
- ・男性が家庭科を教えることに対する賛否
- ・家庭科を男性が教えることと女性が教えることの違い
- ・男性が家庭科を教えることによるメリットと

デメリット

- ・男性が家庭科を教えることに対する期待

□分析プロセス

本研究の分析プロセスは、上述の木下のM-GTAの手法に従って行う。

- ①学生6名を対象に、1人30分程度のインタビュー調査を行う。対象者をA～Fとする。
- ②インタビュー内容を文字起こし、概念化を行う。
- ③複数の概念から理論を作り出す。

□概念化

3段階に分けて概念化を行う。概念化 ver.1では、インタビュー内容からキーワードとなる言葉を抜粋する。概念化 ver.2では、キーワードをもとにしながら概念名の検討とカテゴリ化を行う。ver.3では、ver.2の概念名とカテゴリ化の再検討を行う。概念化 Ver.2と Ver.3では、分析ワークシートを作成し、それをもとに概念の関係図を作成する。概念化のプロセスでは、実際には試行錯誤を繰り返す。

### III 結果と考察

#### 1. インタビュー結果

対象者のインタビュー内容をICレコーダーに録音し、文字に書き起こす。ここでは、6名のうち1名(D)のインタビュー内容を以下に記す。

D (22歳・男性)

所属・学年：国立大学教員養成学部・4年

家族構成：母，兄，本人

<インタビュー前調査>

○希望職種：三重県または石川県の中学校・理科の教員

○実習経験：教育実習，放課後の学習支援(中学校)

○男性家庭科教員の授業受講経験：無

○男性家庭科教員について：いたほうがいい

<インタビュー内容>

(「」：インタビューア，『』：対象者)

「まず，科目の印象として，家庭科の印象を教えてください。」

『家庭科の印象か… 料理作るっていうか、調理実習がぱっと浮かぶ。食のイメージが強い。』  
「たぶんそれは自分が受けてきた授業のことだろうけど、その中で印象に残った授業ってある？」

『…何を作ったかとかは覚えてないな。調理実習室でいるんなものを作った覚えはあるんだけど何を作ったかとかは覚えてなくて、高校では裁縫をした。』

「授業をしてもらった先生の印象は残ってる？」

『中学校の先生は、比較的若めで、関わりやすい先生やって、高校の家庭の先生は、40後半くらいのおばさんでちょっと厳しめやったから生徒からもあんまり好かれてなかった。』

「印象に残っている授業はある？」

『これっていう授業はないかな。』

「アンケート内容について聞いていきます。男性の家庭科教員はいたほうが良いとのことでしたが、それについて理由があればお願いします。」

『やっぱり料理したりするのって、中学校のときは女の人のイメージやったから、そんなイメージを取り払うために男の人がいたほうが、そういうイメージもなくせると思うし、男の人が調理の指導をしてくれてたほうが、男子も積極的に参加するんじゃないかって…自分の時は女子が積極的に参加して、男子がそれについていって感じやったから、男の先生ばかりっていうのはあれやけど、男の先生が少ない現状を考えるといたほうが良いと思う。』

「今の人数が少ないから、今よりは増えるべきだってこと？」

『そうそう。』

「やっぱり食のイメージが強い？」

『そうそう、食のイメージが一番あって、その次が裁縫かな。裁縫は今も苦手やし、授業でも何をやったか覚えていない。』

「そういったことを男の人が教えるってなるとどう思う？」

『調理実習と同じようになるとは思う。だけど今やからそう思うのであって、自分が中学校や

高校の時やったら女の先生でも男の先生でもあんまり違いは感じなかったかもなとも思う。』  
「確かに最初からだったら違和感も感じないかもね。」

『特に小学校とかだったらよけい男の先生でもどうにもならないと思う。』

「今の話に近いかもしれないけど、男の人が家庭科を教えるのと、女の人が教えることで差が出ると思う？」

『どうやろうな それは家庭科やから差が出るとかではないかも。詳しくは言えないけどどんな科目でも男の先生と女の先生だと何かしら影響が出るはず。家庭科もそれとあまり違いはなさそう。』

「その影響についてもう少し詳しく説明できる？」

『例えば、男の先生のほうが男の子は言うこと聞くなって思った。男の子がお父さんの言うことを聞くのと同じような感じかな。』

「あんまり大きな違いが出るものではなさそう？」

『そうやね、さっきの話に戻るけど、家庭科を男が教えたら、自分は家庭科は女の人のイメージあるから、そういうのはちょっとは無くなるかもなあって。』

「それは今だから思えること？」

『そうやね。』

「男の家庭科教員が増えたら期待できることやね。」

『そうそう。』

「他に何か思うことはある？」

『家族のことなんやけど、女の人が家族の話をすると男の人が話をするのではイメージが違うし、男の人が話している姿をイメージすると新鮮かも。うまく説明できんけど。』

「じゃあ最後に、男性の家庭科教員が増えてきている原因が想像できれば教えてください。」

『やっぱり昔と比べると職業的にも生き方的にも男の人やからこう、女の人やからこうっていうのは無くなってきてるみたいだし、それと同じように家督とかでも長男が必ず継ぐ必要も

なくなってきていて、みんな自由に職業ややりたいことを考えられるようになって、みんなが自分は何したいんやろって考え始めた結果かな。』

「職業選択の幅は広がったよね。」

『そうやね、固定観念が無くなってきたってのもあるし、大学にみんなが行くようになって自分のことを考える時間も増えたからかも。家庭科とは全然関係ないけど。』

「それは全然いいよ。」

『そうやって大学行って自分のことよく考えた結果、今までのステレオタイプの職業とは違った職業を選び出す人が多いのだと思う。』

## 2. 概念化・カテゴライズ

概念化・カテゴライズは、研究方法で述べたように Ver.1, Ver.2, Ver.3 の 3 段階で行う。

### (1) 概念化 ver.1

概念化 ver.1 は、インタビュー内容からキーワードとなる言葉を抜き出す。キーワードとは、<データのなかで着目した部分の意味をまず考え、それを適切に表現する言葉> (木下, 2003, P.177) である。本研究では、家庭科の印象に関わること、男性家庭科教員に関係することを中心に次の 7 個をキーワードとした。

- ・家庭科の印象の薄弱、実習への関心の高さ
- ・教員に依る科目への関心、理解度
- ・学習時期と科目への関心度
- ・女性イメージ、男子の興味
- ・身近なものへの興味関心
- ・職業選択の広がり、社会の変化
- ・自己に向き合う

### (2) 概念化 ver.2

概念化 ver.2 では、分析ワークシートを作成して、具体的な内容を概念化し、カテゴライズを行う。分析ワークシートは「概念名」「定義」「ヴァリエーション」「理論的メモ」から構成される。

分析はデータのある箇所に着目しその意味をいろいろと検討する形で始まるので、まずく

データの着目箇所を「ヴァリエーション」欄に記入する。次に、<検討の結果、採用することにした解釈>を「定義」欄に記入する。<それ以外の解釈案で重要なもの>は「理論的メモ」欄に記入する。そして<定義を凝縮表現したコトバ>を「概念名」欄に記入する (木下, 2003, P.190・191)。

Ver.2 では 7 つの概念 (7 枚の分析ワークシート) を導いた。7 つの概念は「必要性、興味の薄弱」「授業者に依るところの大きさ」「社会に対して主体的に考える授業」「女性イメージからの脱却」「時間と社会の変化による受け入れ」「教科書、教室にこだわらない授業」「男性による家庭科のイメージ改革」である。A~F はインタビュー対象者である。A~F の記述のない箇所は、該当する発話がなかったことをあらわす。

分析ワークシートから、概念同士の関係を判断し、より密接に関係している概念を 1 つのカテゴリーとし、カテゴリー名をつける。概念化 ver.2 では、「家庭科としての現状と課題」「男性の家庭科教員の現状と課題」「科目としての課題解決」「男性家庭科教員の課題解決」「家庭科に求められていること」の 5 つにカテゴリー化できた (図 1)。図 1 の太枠内がカテゴリー名、細枠内が分析ワークシート中の概念名である。

### (3) 概念化 ver.3

概念化 ver.2 の分析ワークシートをもとに、カテゴリー化の再検討を行う。概念の関係図 (図 1) と分析ワークシートを相互に関連させながら、まず分析ワークシートを修正し、それをもとに関係図を修正する。Ver.3 では、分析ワークシートの概念名の再検討、概念の分割、理論的メモの追述を行った。

その結果、8 つの概念「必要性、興味の希薄」「授業者の個性に依るところの大きさ」「時間と社会の変化による受け入れ」「調理・裁縫実習の過剰な印象」「女性イメージからの脱却」「男性による家庭科のイメージ改革」「教科書、教室にこだわらない授業」「社会に対して主体

## 概念化 Ver.2 の分析ワークシート(一部)

概念名	必要性, 興味の薄弱
定義	家庭科の必要性が十分に理解されていないことなどから起こる家庭科への興味の薄さ
ヴァリエーション	<p>A 小学校はまだ実践的なことが多かったっていうか、なんか作ったり料理することが多くって、楽しかった部分はあるんですけど、中高は、まだちょっと、あんまり、楽しい思い出が、ないです。まあ将来の役に立つものかなって思うんですけど、どっちかっていうと女子のほうが役立つかなっていう、男子に関しては、それほど役に立つことが少ないかなっていうのはあります。</p> <p>B 鮭のムニエルを作ったのだけ覚えてます。 あんまり覚えてないです。大学の授業の家庭科でも裁縫とかした時間があって、そっちばかり覚えてて… あまり印象に残ってないです。</p> <p>C 栄養とか、はっきり覚えていないんですけど物を買うための勉強？をやりました。</p> <p>D 家庭科の印象か… 料理作るっていうか、調理実習がぱっと浮かぶ。食のイメージが強い。 …何を作ったかとかは覚えてないな。調理実習室でいるんなものを作った覚えはあるんだけど何つくったかとかは覚えてなくて、高校では裁縫をした。 食のイメージが一番あって、その次が裁縫かな。裁縫は今も苦手やし、授業でも何をやったか覚えていない。</p> <p>E 中高の時は…調理実習くらいかな。 テストに関係ないって思っていたり、受験に関係ないとかそういうので、おれだけじゃなくて他の人もなんか内職やったりとかはしとったね。たぶん調理実習とか献立作ったりとか覚えとるのは、たぶん体を動かしたり、机にすわっとるとかじゃなくて、体験をともなった学習内容だったからかなって。 正直言ってないな。</p> <p>F 家庭科の印象は、副教科なので、受験に関係なかったから、自分としては、特に中学校、高校では息抜きとしてやってました。 やっぱり調理実習が強いよね。その次に、ナップサックを作ったり、裁縫がすごい印象的かな、家庭科の印象は小学校が一番強い。 家庭科は生活に関係してくるから、すごい上っ面なことを言えば、ロールプレイングとかで印象付けするのはいいと思う。やってる本人たちは残ると思う。</p>
理論的メモ	(記述なし)

的に考える授業」を導いた。また、ver.2では、「必要性・興味の薄弱」の中にあつた「必要性・興味の希薄」と「調理・裁縫実習の過剰な印象」の概念を含めていたが、それらを分割して明示した(図2)。

概念化 ver.2 では、家庭科と男性家庭科教員

の課題解決のカテゴリーの両方に該当する概念があることがわかった。そこで ver.3 では、「家庭科に求められていること」の1つにまとめ、簡略化した。図1と同様に、太枠内がカテゴリー名、細枠内が分析ワークシート中の概念名である。

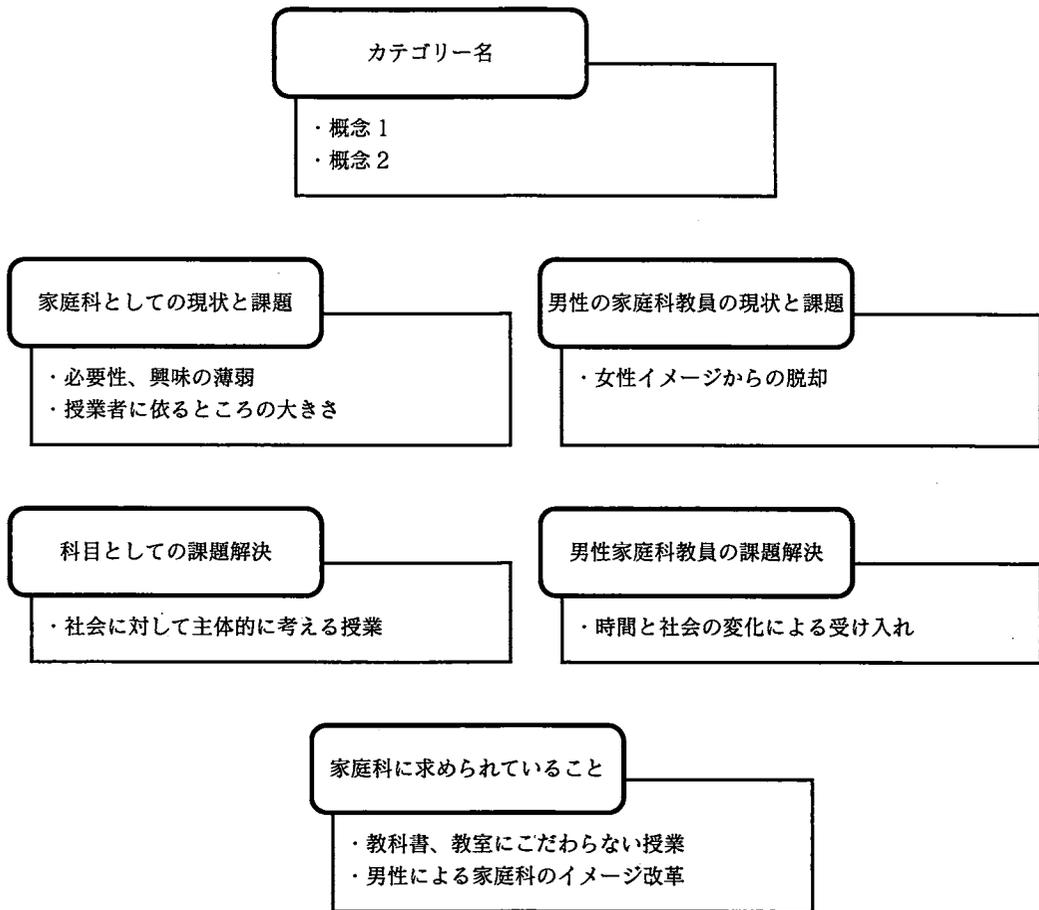


図 1 概念化 Ver. 2 の概念の関係図

概念化 Ver.3 の分析ワークシート

概念名	必要性、興味の希薄
定義	家庭科の必要性が十分に理解されていないことなどから起こる家庭科への興味の薄さ
ヴァリエーション	<p>A 小学校はまだ実践的なことが多かったっていうか、なんか作ったり料理することが多くって、楽しかった部分はあるんですけど、中高は、まだちょっと、あんまり、楽しい思い出が、ないです。まあ将来の役に立つものかなって思うんですけど、どっちかっていうと女子のほうが役立つかなっていう、男子に関しては、それほど役に立つことが少ないかなっていうのはあります。</p> <p>B あんまり覚えてないです。</p> <p>C 栄養とか、はっきり覚えていないんですけど物を買うための勉強？をやりました。</p>

	<p>D</p> <p>…何を作ったかとかは覚えてないな。調理実習室でいろんなものを作った覚えはあるんだけど何つくったかとかは覚えてなくて、高校では裁縫をした。裁縫は今も苦手やし、授業でも何をやったか覚えていない。</p> <p>E</p> <p>テストに関係ないって思ったり、受験に関係ないとかそういうので、おれだけじゃなくて他の人もなんか内職やったりとかはしとったね。たぶん調理実習とか献立作ったりとか覚えとるのは、たぶん体を動かしたり、机にすわっとるとかじゃなくて、体験をともなった学習内容だったからかなって。正直言ってないな。</p> <p>F</p> <p>家庭科の印象は、副教科なので、受験に関係なかったから、自分としては、特に中学校、高校では息抜きとしてやってました。家庭科は生活に関係してくるから、すごい上っ面なことを言えば、ロールプレイングとかで印象付けするのはいいと思う。やってる本人たちは残ると思う。</p>
理論的メモ	<p>必要性→家庭科が社会に出てどう役立つかわからない。</p> <p>概念「授業者の個性に依るところの大きさ」→科目としての印象の薄さ</p>

概念名	授業者の個性に依るところの大きさ
定義	家庭科の授業の特性から、他教科に比べて授業者によって科目に対しての関心・意欲が大きく左右される
ヴァリエーション	<p>B</p> <p>それは、その時の実習の班がおもしろくって…。</p> <p>C</p> <p>まず小学校で、一日の献立を考えようみたいなのをやって、小学校のほうが家庭科のイメージがよいです。中学校では勉強のための家庭科、っていう印象であまり面白くなくて、小学校では楽しく調理実習、楽しく裁縫みたいなのがあったので…。高校の2年生だったんですけど、家庭科の先生がすごく厳しくて、アイロンがけなんかでもいちいち手直しが入ってあまり面白くなかったです。</p> <p>E</p> <p>たぶん衣食住の食を習ってて、バランスを考えて献立を考えましょうみたいな、たぶん最後のほうにあるやつかな。</p> <p>そもそも男の先生やと新鮮で面白いんじゃない？たぶん中学校とか高校やと男の先生のほうがからみやすいんじゃない？キャラもあるやろうけど、新鮮味があれば面白い授業になるんじゃない？</p> <p>F</p> <p>高校になると、すごい強烈な先生やったから、家庭科は好感は持てた。けど授業は調理実習くらいしか覚えてない。</p>
理論的メモ	<p>授業者→授業に参加するすべて。教員、生徒</p> <p>概念「必要性、興味の希薄」へとつながる。</p>

概念名	時間と社会の変化による受け入れ
定義	時間とともに変化している社会の風潮によってこれまでとは違った家庭科としての在り方

ヴァリエーション	<p>A 最初のころはちょっと違和感があるかもしれないですけど、ちょっと時間がたてばふつうの先生かなっていう男女差別が問題になってきているから、男性もいってという風潮があったり、男性でも育児休暇が取れたりして、そういう意味では家庭に関する機会が、昔よりは男性が女性がついていうあれがなくなってきたから、男性が増えてきているんじゃないですかね。</p> <p>B 共働きが増えたからだと思います。共働きの家だと、お父さんが普通に洗濯とかをやっているのを見ているから、その子どもが大きくなって家庭科の先生として家庭科を教えることに抵抗を持たなくなったし、むしろ興味があるってことも出てきたんだと思います。</p> <p>C 女の人が家事をするって考えはなくなってきて、男の人が家事をするのも当たり前っていう世の中になってきて、教師側が、家庭科なんて女がやるものやっという考えも、教師側からなくなってきて、それを学んできた子どもが大きくなって家庭科の先生になる人が増えているんだと思います。</p> <p>D 昔と比べると職業的にも生き方的にも男の人やからこう女の人やからこうっていうのはなくなってきてるみたいだし、それと同じように家督とかでも長男が必ず継ぐ必要もなくなってきていて、みんな自由に職業ややりたいことを考えられるようになって、みんなが自分何したいんやろって考え始めた結果かな。固定観念がなくなってきたってのもあるし、大学にみんなが行くようになって自分のことを考える時間も増えたからかも、家庭科とは全然関係ないけど。</p> <p>E イクメンとか、そういうの関係あるんじゃない？社会が男は、女はっていうのも減ってきてそういう垣根もなくなってきてっていう感じなんかね…違和感っていうのも徐々に減ってきてる。もしかしたら家事をしとるお父さんにあこがれてとかもあるかもしれんね。</p> <p>F 男女雇用機会均等法で共働きの家族が増えてきてってなると、洗濯とか調理とか掃除とかは、今までは女の人がやってきたけど、それは固定概念であって、やっぱり男目線の家庭科の大事さとかは知りたいっていうのはあるよね。結婚したら家事やるかもしれんってこと考えたら男性目線でもそういうことは知りたいって今になって思うからおってもいいかなって。 昔よりも技術は男、家庭は女っていう分業はなくなってきたからかな。そうすれば家庭科やってみたいなっていう人も出てきてもおかしくないんじゃないかなって思う。</p>
理論的メモ	(記述なし)

概念名	調理、裁縫実習の過剰な印象
定義	調理実習や裁縫実習の大きな印象によって他分野の印象が残りにくい
ヴァリエーション	<p>B 鮭のムニエルを作ったのだけ覚えてます。 大学の授業の家庭科でも裁縫とかした時間があつて、そっちばかり覚えてて…あまり印象に残ってないです。</p>

	<p>D 家庭科の印象か… 料理作るっていうか、調理実習がぱっと浮かぶ。食のイメージが強い。 食のイメージが一番にあって、その次が裁縫かな。</p> <p>E 中高の時は…調理実習くらいかな。</p> <p>F やっぱり調理実習が強いよね。その次に、ナップサックを作ったり、裁縫がすごい印象的かな、家庭科の印象は小学校が一番強い。</p>
理論的メモ	(記述なし)

概念名	女性イメージからの脱却
定義	家庭科や家事に対する女性がやるもの、やるべきものといったイメージがまだ根強い
ヴァリエーション	<p>A まずイメージとして、音楽とか家庭科っていうのは女の先生がやるっていうイメージがあるけど。 やっぱり女子のほうが、家事をやった時間というか、料理作ったり洗濯したり、子どものころから手伝ってきたり、大学入ってからでも自炊したりっていう面でやっぱり家庭科に関することは結構やってるのに対して、男子はあんまりやってきてない、やってきている人もいるとは思うんですけどやってきてない人のほうがほとんどなんで、教えるときに、知識とかそういう面では男性より女性のほうが確実に多く持つてると思うんで。</p> <p>B うーん、中学校も高校も女の先生だったから、イメージがないから想像が出来ないだけで、別にしてもいいかなとはもともと思っていたんですけど、大学の授業で男の先生が家庭科をやってるビデオを見て、あの人見てなんかいいなあって思ったから、全然男の人がやってもいいなあとと思います。 女の家庭科の先生は、お母さんから聞いているみたいで、なるほど、みたいな、しかも私が今まで接してきた家庭の先生は、みんなやさしくお母さんみたいな人たちで、だから授業もお母さんと話するみたいに聞けたけど、男の人の授業は見たことがないから、そういう風にできるかなっていうのはあります。</p> <p>C 家庭科って女性が教える印象が強いですけど。</p> <p>D やっぱり料理したりするのって、中学校のときは女の人のイメージやったから。</p> <p>E 身近な人が男性で家庭科の教員になりたいって聞いて正直、そういうのもあるんやってそれまで全然考えなかったけど、身近にそういう人がおるんやったらまあそういう人がおってもいいんじゃないかなっていう考えになったかな。</p>
理論的メモ	(記述なし)

概念名	男性による家庭科のイメージ改革
定義	男性が家庭科を受け持つことで、子どもの中にある固定観念を揺るがし、興味を持たせる

ヴァリエーション	<p>A 男性のほうがちょっと怖いというか、威圧的なイメージがあるから、僕みたいな家庭科が暇でつまらんかったっていう生徒に対してちょっと怖いから真面目に受けてみようかなっていうことが出来るんじゃないかな。</p> <p>C どうせ家のことやろって男の子が思っちゃうけど、それを男性が教えることで、自分と同じ男なんで、共感を持って話を聞けるというところがあるのかなって思います。関係ない話じゃなくて、自分も男やからって理由で結構聞くんじゃないかなって思います。</p> <p>新鮮な感じはすると思う。けど、それはそれでいいと思います。というのは、私の音楽の先生が中学校までは女の先生だったんですけど、高校は男の先生で、それに対して何か思うところがあったわけではなくって、ただ新鮮やなって思いました。だから生徒も新鮮に思うんじゃないかなと思います。</p> <p>女の子は女の子で高校生とかになったら、自分の結婚相手が家事してくれる人だったらいいので、そうやって男子生徒が家庭科の授業に参加するのはすごいいいことだなって、私が生徒だったら思います。</p> <p>D イメージを取り払うために男の人がいたほうが、そういうイメージもなくせると思うし、男の人が調理の指導をしてくれてたほうが、男子も積極的に参加するんじゃないかって…自分の時は女子が積極的に参加して、男子がそれについていくって感じやったから、男の先生ばかりっていうのはあれやけど、男の先生が少ない現状を考えるといたほうがいいと思う。</p> <p>家庭科を男が教えたら、自分は家庭科は女の人のイメージあるから、そういうのはちょっとは無くなるかもなあって。</p> <p>家族のことなんやけど、女の人が家族の話をするのと男の人が話をするのではイメージが違うし、男の人が話している姿をイメージすると新鮮かも。うまく説明できんけど。</p> <p>E いたら面白いんじゃないかって思ったのもある。</p> <p>F 学校では男の先生が家庭科をやれば、家事をするのは男なの女なのっていう固定概念を払しょくするとか。そういう影響はあるんじゃないかな。</p>
理論的メモ	<p>「女性イメージからの脱却」→「男性による家庭科のイメージ改革」 →家庭科に求められていること 男性→男性家庭科教員, 男子生徒</p>

概念名	教科書, 教室にこだわらない授業
定義	座学中心の授業ではなく、実習時間も十分にある科目ならではの教科書, 教室にとられない授業の提案
ヴァリエーション	<p>A 家, 住居に関する事で、男だったら多少の力仕事ができることを考えたら、住居の間取りを紙に書くだけじゃなくて、実際に作ってみたりするっていうのは、女性の方でもできるかもしれないですけど、作るっていう面では男性のほうが得意かなっていうイメージがあったり。</p>

	<p><b>B</b></p> <p>泥遊びをしているのをめっちゃ覚えてて、結構親の人から反感というか…すごい信頼ないとできないじゃないですか、けどそういうのも含めてちゃんと信頼を得ているのは男性とか女性とかじゃなくて、その人の人柄というか、授業方針とかそういうほうが大切だから、性別よりもそういうののほうが大切なんやなって思いました。</p> <p>私の中でこういうのをしてほしいなっていうのは、調理実習的なって調理室でしかやらないじゃないですか？そうじゃなくて別のところ、アウトドア的な料理をやってみたいです。外でするときはこうすればいいよってやつとか、火とかを扱うから男の人がやったほうがいざっていうときによさそうです。</p>
理論的メモ	<p>男性教員への期待</p> <p>→「社会に対して主体的に考える授業」</p>

概念名	社会に対して主体的に考える授業
定義	自ら考え、目標を持って主体的に授業参加することが出来る授業を作ること科目への関心意欲を高める。
ヴァリエーション	<p><b>B</b></p> <p>実際の社会で使うってなった時に、授業中にどれだけそういう場面を作り出せるかっていうのが大切だっていうのは最近すごく思います。なので、その場面の設定とかを私たちはすごく気にするんですけど、教師側からああしなさいこうしなさいと言うのではなくて、子ども側から『あれしたいこれしたい』って思えるような場面設定をしようとしています。</p> <p><b>E</b></p> <p>技術とあって好きやったんやって。それって自分なりの目的があったっていう…何かを作る。自分オリジナルのものを作るっていう自分なりの求めていうのがあればいいなどは思ってるんやけど。</p> <p>調理実習とかやと何々を作りたいとか、何々したいっていうそういうのがあれば…役に立つ役に立たないっていうか自分がやりたいかっていう…後々のことを考えずにがんばれるみたいなの。</p> <p><b>F</b></p> <p>消費者とかも覚えてる。クーリングオフとか自分に関係あるからこれは覚えとかんなんっていうの中で3の時に必死に覚えた気がする。</p>
理論的メモ	(記述なし)

概念化 ver.3 の結果、次のことがわかった。

「家庭科の現状と課題」として、「必要性・興味希薄」、「授業者の個性に依るところの大きさ」が挙げられる。これによって、科目としての印象を薄くしている。「調理・裁縫実習の過剰な印象」から、家庭科は印象が薄い、そのなかでも調理・裁縫実習は今日でも印象が強い。「時間と社会の変化による受け入れ」は、男女必修化や男性の家庭科教員の存在によって、教科の在り方が変化しているなかで、徐々にでは

あるが、社会に受け入れられていることを表す。「男性家庭科教員の現状と課題」の、「女性イメージからの脱却」は、分析ワークシートの「時間と社会の変化による受け入れ」の記述からもわかるように、家庭科イコール女性のイメージが根強いことを示し、そこからの脱却が必要であることを示す。「男性による家庭科のイメージ改革」では、男性の家庭科教員が家庭科のイメージを変えることに対して期待があることがわかる。

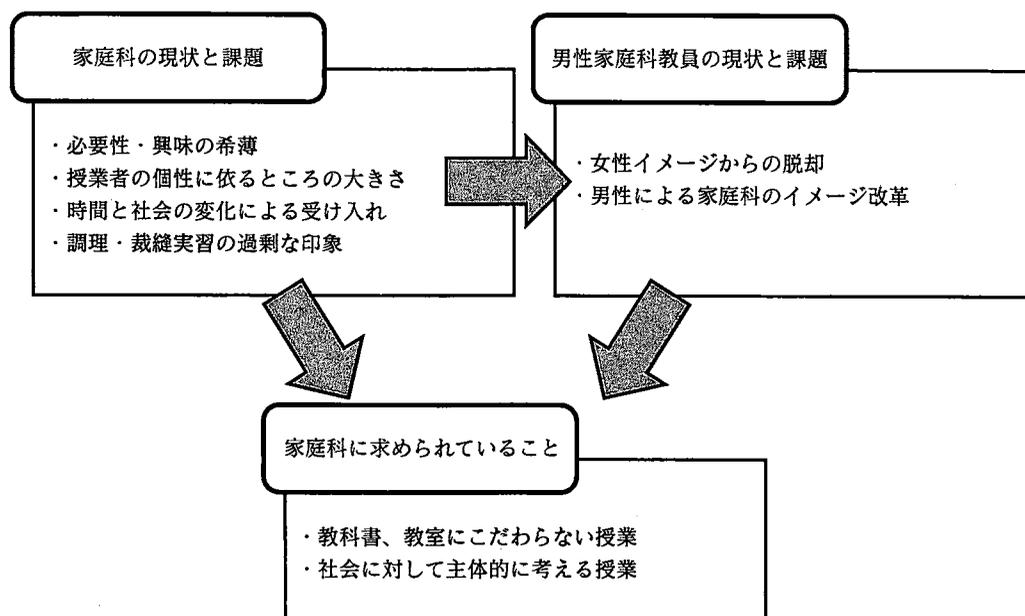


図 2 概念化 Ver. 3 の概念の関係図

図 2 の上部 2 つのカテゴリー「家庭科の現状と課題」「男性家庭科教員の現状と課題」から、下部の「家庭科に求められていること」が導き出される。「家庭科に求められていること」には、「教科書、教室にこだわらない授業」、「社会に対して主体的に考える授業」があることが導かれた。前者は、家庭科教員全体に期待されているが、より男性家庭科教員に期待されることである。また、「教科書、教室にこだわらない授業」と「社会に対して主体的に考える授業」は相互に関連している。

以上により、家庭科に求められていることは、「家庭科の現状と課題」、それにともなった「男性家庭科教員の現状と課題」から成り立っており、「教科書、教室にこだわらない授業」と「社会に対して主体的に考える授業」の 2 つが課題として浮かび上がった。すなわち、男性家庭科教員の課題は、家庭科の課題でもあり、家庭科に求められていることと同じである。

「教科書、教室にこだわらない授業」とは、全ての授業がそうあるべきということではない。教科書や教室にこだわりすぎず、現在の子

どもに必要なことを教員自身で考え授業提案を行っていくことである。「社会に対して主体的に考える授業」とは、社会に出て利用できる技能の習得、生徒の思考や思いに寄り添い生徒自らが考えて主体的に授業に参加すること、また、社会の身近な問題に対して解決・改善する授業や、社会に能動的に参加する市民を育成することである。これらは家庭科だけのことではなく、また、今までも言われてきたことかもしれない。しかし、家庭科では、家庭生活の営みに参加でき（生活的自立）、生活をとりまく諸環境のあり方に主体的に共同して発言していく生活者の育成をめざしている（鶴田，2012）ことや、子どもたちの現実生活を立ち上げさせて、実習や実験、調査、討論など多様な学習方法により学ぶことから、より切実な課題と言える。

#### IV まとめと課題

教員養成学部の大学生を対象に、男性家庭科教員に対する印象や考えを聞き取りし、M-GTA の手法を用いて男性家庭科教員増加に

向けての背景を探った。その結果、家庭科に求められているものとして、家庭科の現状と課題、それにもなった男性家庭科教員の現状と課題から、「教科書、教室にこだわらない授業」と「社会に対して主体的に考える授業」が導き出された。つまり、男性家庭科教員の増加に向けた課題は、家庭科全体の課題でもあり、家庭科全体に内在する課題を解決することにより男性家庭科教員が増加する可能性が示唆された。

この結果を、数の上で一方の性に偏った組織や分野へ応用するならば、次のようなことが考えられる。その組織・分野そのものに根本的な課題が内在しており、その解決が構成員の性の偏りを解消する手がかりになるということである。

本研究結果の信憑性や妥当性をさらに検証するためには、インタビュー内容や対象者・対象者数や、他の方法による分析の併用などを検討する必要があるだろう。

本研究で用いた M-GTA は、これまでに多く見られた研究方法である量的研究に対して、インタビュー内容を深く読み込んでいく質的研究の 1 つである。この研究方法は、1 つの専門的な分野について 1 つの理論を構築することで、別分野での応用が期待される。社会が大きく変化している現在において、このような研究は、従来の量的研究と合わせて利用することで、さらに研究が深められると感じられた。本研究で

は他分野への応用を行うまでの十分な理論構築までには至らなかった。今後の課題としたい。

本研究は、「男性家庭科教員の現状と課題」(山川岳) (平成 28 年度金沢大学人間社会学域学校教育学類卒業論文) をもとに加筆修正したものである。

#### 引用・参考文献

- 藤田智子, 大学生の「家庭科」に対するイメージにみる男女共修家庭科の意義と課題, 名古屋女子大学紀要, 59, P.1-12, 2013
- 麓博之・杉井潤子, 男性家庭科教師の現状と教育効果—ジェンダーの視点から—, 奈良教育大学紀要, 第 54 巻第 1 号, P.193-200, 2005
- 木下康仁, グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践, 弘文堂, P.8・34・177・190・191・他, 2003
- 文部科学省, 学校教員統計調査, 2015
- 田中和江, 男性家庭科教員に関する研究動向, 女子栄養大学 教育学研究室紀要:「教育とジェンダー」研究, 10 巻, P.52-61, 2013
- 鶴田敦子, 家庭科教育の立場から—リアルな課題を問う—, 教育目標・評価学会, 教育目標・評価学会紀要, 第 22 号, 2012, P.9-16
- 吉野真弓・深谷和子, 男性家庭科教員の意義と役割—生徒のジェンダー形成とのかかわりで—, 日本家庭科教育学会誌, Vol.44-3, P.242-251, 2001